
白竜奇譚・出会いの巻

真下守里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白竜奇譚・出会いの巻

【Nコード】

N6385L

【作者名】

真下守里

【あらすじ】

舞台は、架空の王国「下つ国」しもつくに。どういいうわけか過去の記憶を失って、この国の王宮に落ちた白い竜は、そこに「人質」として預けられている隣国の王子ユアン・カイと出会った……

まるで、作り物みてえだ。

何の因果か脳天を怪我したせいで、ご幼少のみぎりも含めて記憶
って記憶が全部吹っ飛んじまった俺に言えたことじゃねえんだが、
「子どもの目」ってのは、もっと、こう……キラキラしてたり、と
か、くるくる動いてたり、とかしてるもんじゃなかるうか？

なのに奴の目ときたら。

光もねえ、動きもねえ。ただ、目の前にあるものが映りこんでる、
それだけ。

いや、目だけじゃねえな。顔つきそのものがそうだ。

笑ってもしねえ。怒ってもしねえ。ありていに言えば……そうだ
な、「実はこいつは人間じゃねえ、木偶人形なんだ」って言われた
ら、つい「ああそうかな」って思っちまう、みてえな？

人形みてえだから、しゃべることもねえ。最初なんか、口がきけ
ねえのかと思ってたぐらいだった。

けど、どうやらそれは違っていたらしい。日に一度は学問の先生
がやって来て、あれこれと奴に教えてるんだが、そんなときには、一
応、書物を音読したり、先生の質問に答えたりはするんだ。これが
また、いい声なんだよな。鈴を鳴らしたみてえに澄んだかわいら
しい声なんだ。だけど、先生が帰っちまうと、また表情のない木偶
人形に逆戻り。部屋の窓辺に座り込んで、だまあって空ばかり眺
めて……

そんな調子だったから、俺がためしに、

「おまえ、名は何と言っ？」

って尋ねてみたときにも、眉ひとつ動かしやなかった。

普通は驚くぜ？ 何たって俺は、ヒトじゃなくて、竜なんだから。奴の手のひらにのっかちまうほどのチビではあったけど、一応角だってキバだって翼だってちゃあんと生えてる。

そんな、自分で言うのもナンだが面妖な代物が、いきなり人語じんごで話しかけてきたんだ。「おおっ、竜がしゃべってるぞ！」とか、せめて「うわっ！」ぐらいの反応はあっていいんじゃないのか？

なのに、奴は顔色ひとつ変えず、ぽつつと言、

「ユアンカイ」

「やんかい？」

「ユアン、カイ」

一語ずつ区切って繰り返すと、またぼーっと空なんか眺めてる。

ほんと、変わった奴だ。一緒にいたって、ちいっとも面白くななかねえ——まあ、脳天も含めて、体中に大怪我して動けなくなってた俺を、ここまで連れてきて介抱してくれたんだから、あんまり文句を言えた義理じゃねえけどな。

その大怪我も、一月も経つと、随分と良くなってきた。なにぶん片っぱの翼がぼつきり折れちまったんで飛ぶことだけはまだ駄目なんだが、ちょこちょこ歩いて散歩に出ることぐらいは十分にできる。で、俺は、ほかの奴らに見つかかねえよう姿を消したうえで、あつちこつちと歩き回り……そのついでに、カイ（二つも並べて名前を呼ぶなんてしちめんどくさいんで、俺は勝手にそう省略することにしたんだが）が、この屋敷でどんな立場にあるのかってことも、なあんとなく知ることができた。

一応、奴はこの次男ってことになっていた——表向きはな。上には年頃の姉ちゃんがひとりと、当年取って十になるカイよりも、ちよっとだけ年上の兄ちゃんがひとり。

だけど、どうやらこの二人、カイと血縁だつてわけじゃねえらしい。それが証拠に、例えば食事時なんかにかイが姿を見せても、二人とも妙によそよしいんだ。ふたりつきりできるときには、普通に笑ったりしゃべったり、時には姉弟喧嘩したりもするのに、カイに対しちや同じことは決してしねえ。

特に兄ちゃんの方ときたら、あからさまに憎々しげな目えしてカイのこと睨んで……一度なんか、手が滑ったふりしてわざとカイの食事の皿全部床にはたき落として、ニヤニヤ薄ら笑いしてやがった！俺は、それ見て自分のことでもねえのにはらわた煮えくり返る思いでいたんだが、カイの方は、果たしてどう思ってたんだか……だまあって床にかがんで、欠けた皿も落ちた食いもんもぜーんぶ拾って、手ずから箒と雑巾持って掃除までして。

で、結局、瀬戸物の欠片が混じっちゃったもんだから食いもんも全部捨てる羽目になって、一食丸々食えずにすごすご部屋に戻ったもんだつたつけ——いくら貰い子だからって、飯にもでけえお屋敷のお坊ちゃんがだぜ？

だから、思わず俺は言つたよ。「おまえ、悔しくはないのか？やり返せとは言わんが、せめて『やったのは兄上です』の一言ぐらい言つたらどうなのだ！」ってさ。

でも、カイはやっぱりだまあったまんま、ぼーっと空を眺めてた。ほんと、わかんねえ奴だ。もしかしたら、頭のネジが一本飛んじまってるんじゃないだろうか？

そんなカイの奴が、珍しく自分から動いた。

さらに月が替わったある日のこと、その日の武術の鍛錬と勉強を済ませると、奴はおもむろに庭に出て行った。

この庭がまた相当広いんだ。古今東西の庭園があっちこっちに点在してるうえに、雑木林や山まである。まだ顔を見たことさえねえからあくまでも推測の域を出ねえんだが（例の怒髪もんの食事のときだって、その場にいたのは姉弟3人と給仕だけだったし）、カイの養い親って、かなりのお偉いさんなのかもしれねえな。

広々とした芝生に動植物の形にきれいに刈り込まれた植栽（何で植物をわざわざ別の植物の形にしなきゃならねえのかは謎だが）が規則正しく配置された庭園を抜け、玉砂利を敷き詰めて水の流れが何かに見立てた庭園を通り越し、やがてカイは雑木林に入り込んだ。これだけ広い敷地だと、庭師の手もここまでは回らねえらしい。

林には道らしい道もなく、一歩踏み出すたびに、あっちこっちからぴしぴしぱしぱしと木々の下枝が攻めてきた。

これが、特に奴の左の肩口にのっかっている俺に、まともにぶつかってくるんだよな。

「……嫌なら、いね」

わーわーぎゃーぎゃー騒いでいる（つつても、ヒトの耳には「きゅっ」とか「きゅるるっ」とかってふうにししか聞こええんだけど）俺をちらっと見やって、ぼそりとカイが言った。

そうそう、ここはどうやら俺が暮らしていた場所とはいささか離れているらしくって、言葉も微妙に違ってるんだ。で、「いね」っ

ていうのは「帰れ」ってことらしいんだが……へっ、だあれが帰るもんかよ。だって、ひっさびさに、ちよっくら「面白そうな」ことが起きようとしてんだぜ？

そうこうしてるうちに、突然雑木林が終わった。おおっ、と俺は声を上げた。

目の前に、花々の絨毯が広がっていた。白だの薄桃色だの群青色だの紫色だの……まあ、こういうところに咲いてるんだから名もなき花なものには違いないんだが、どれもなかなか可憐で、さしずめ自然界の神の妙技を見た感じだ。もしかすると、ここはカイの「お気に入りの場所」なのかもわからん。

花たちの傍らにしゃがみ込むと、カイはその中の何本かを手折り始めた。俺は瞠目した——カイの口角が、わずかながら上がっている。こいつでも、笑うことがあるんだ……

小さな花束をひとつ作って、奴は元来た道を引き返した。慌てて俺は、奴の懷に飛び込んだ。また同じ目に遭っちゃかなわねえからな。

入ったことねえ奴にはわからねえだろうが、懷つてのは、そりゃああったかくって気持ちいいもんなんだ。おまけに、カイは歩いてるから、適度な揺れまで加わって……俺はいつしか、うたた寝なんかしちゃった。

だから、奴が自分の部屋に戻る前に姉ちゃんの部屋に立ち寄ったんだってことも、その姉ちゃんの金切り声が聞こえて、初めて気がついたんだ。

『ちょお、何しとんあんた！ そがいななりで、こがいなとこ来よって……！！ ああ、いらんいらんそげなもん。花嫁衣裳が汚れてしまっけんな……！』

花嫁衣裳、の一言で、俺はようやく合点した。カイが花を摘んだのは、姉ちゃんに輿入れの祝いをあげたかったからだっただんだ。にしても、姉ちゃんも姉ちゃんだ。そりゃあ、薔薇だの百合だのに比べたら見劣りする花かもしれないねえよ？ だけど、だからって、何もそんな「汚れ物」みてえな扱いするこたあねえだろう。

でも、カイは、やっぱり何にも言い返さなかった。目の前でぴしやりと閉められた扉を少しの間見つめ、右手に持った花束を一瞬だけぎゅっと握り締めると、奴はくるりときびすを返した。

「なあおい！ どうして——」

懷からひよいと顔を出して俺は言いかけたが、そこで口をつぐみ、姿を隠した——いきなり、今度はあのクソ兄貴が登場しやがったんだ。

「おい貴様！ 稽古では、よくもオレに恥かかしてくれよったな！」

言うのが早いか、カイのほつぺためがけて鉄拳が飛んだ。懷に入れた俺ごとカイは吹っ飛び、床に転がった。その腹へ、さらに兄貴の踵がねじ込まれる。呻き声を上げて、カイはぐったりとなった。

（野郎……っっ！）

たまらず俺は懷を飛び出すと、兄貴の脛に噛みついた。

が、哀しいかな、ガタイの小ささが災いして、蚊が止まっただぐらいにしか思われなかったらしい。ふん、ってな顔をしただけで、奴は、ぶん、と脛を一振りし、あっさり俺をはたき落とした。しかも、ここで俺はとんでもねえ失敗をしちまった。床に叩きつけられた拍子に、うっかり「きゅっ！」って悲鳴をあげちまったんだ。

とたん、ひっくり返ってたはずのカイが、ばね仕掛けの人形みたいに跳ね起きた。口の中で何事か呟くと、奴は一直線に兄貴めがけて突っ込んで行った――

それから一刻ほど後。

「……本当に申し訳なかったな」

寝台に横たわったカイの上着をめくって胸や腹にいくつもできた青あざに湿布を貼ってやりながら、俺は深々と頭を下げた。

まったく、「申し訳ない」以外の何もんでもなかった——俺がドジを踏んだせいで、カイはさらに何発も兄貴にぶん殴られ、蹴っ飛ばされる羽目になったんだ。

おまけに、騒ぎを知った養い親に呼び出され、そこでもしこたま灸を据えられた。弟は、兄に逆らうものではない。まして相手はこの国の次の王となる身、その体に傷を負わせるとは何事か——養い親は、二人揃って口々にそうカイを……カイだけを責めた。本当に悪いのは、ただかたか武術の稽古で負かされたぐらいでカイを逆恨みした、あのクソ兄貴の方だったのに……！

無論、俺としちゃ、「何で言い返さなかったのだ」と言いたいところではあったんだが、たとえば言われたのがカイじゃなく俺だったとしても、それは無理だったろう——養い親の方に、まるで聞く気がなかったんだから。

言いたいことだけ言っちゃまうと、奴らは警備兵に命じて、カイをさっさと部屋から連れ出させた。ボタン、と大きな音を立てて扉が閉まり、ガチャリと中から鍵がかかった……

「おまえ……ずっと、こんな思いばかりしてきたのだな」

やりきれねえ。ほんと、やりきれねえよ。カイがいつたい何をし

たつてんだ。ただ、あいつらと血縁がない、それだけの話じゃねえか。

だいたい、かりにも養子に貰ったんだったら、ちゃんと最後まで面倒見てやれよ。自分の子だけじゃなく、ちゃんとこいつの話も聞いてやれよ……！　　ったく何が「国王」だ。あんな奴らが王家なんぞやってるんじゃ、この国の将来もたいしたことねえな。

「……なあ。おまえ、もう飛べるんか」

だしぬけに鈴のような声がして、俺は我に返った。

「さっき、兄上んここに飛んで行きよったろ？」

そう確かめると、カイはそつと手を伸ばして俺の翼に触れた。

「ん……いろいろでも痛うなさそうじゃな。体の傷ものうなっとるし……」

その口角がほんの少しだけ上がって、かすかな笑顔を作る。

「ほうかぁ……良かったのぉ、これでもう家にいんでもええぞ」
「え……」

傷が良くなったから、もう家に帰ってもいい——そう言われているのは、なんとなくわかるんだが……

（そう言われてもなあ……）

その「家」がどこにあるのか、こっちが聞きたいぐらいなのに。それに、それを抜きにしても、なんだか素直にはうなずけねえ気

分だった。だって、カイの笑顔は……確かに笑ってはいるのに、全然嬉しそうには見えなかったから。

だけど、カイは構わず俺を抱き上げ、体の痛みに顔をしかめながらも立ち上がった。ずんずんと部屋を出、庭に出る。

そして、灯籠が立ち、鯉が泳いでいる池のほとりへやって来た。

ふたつき
二月前、俺が意識を取り戻した場所。初めてカイと出会った場所……

「ほんなら、ここだな」

俺を御影石のひとつに置き、くるりと背を向ける。

「早う、いね。オレのことなら構んけん。とうに心積もりはできとったけんね」

はっと俺は胸を衝かれた。ほとんど確信に近い推測が脳裏をよぎる。

こいつが「ぼーっ」としている「ように見えたのは、「一本ネジが飛んでた」からなんかじゃねえ。あえて俺と口をきくのを避けてたからだっただ。そんなことをしたら情が移るから。そうして、別れがつかなくなるから……」だったら、最初から割り切って距離を置いた方がいい。きつと、そう考えていたんだろう。

ほかのことにしたってそうだ。

こいつに「表情がなかった」のも、きつと、それと同じ「割り切り」をした結果だったんだ。兄貴にあんな目に遭わされて、悔しくねえわけがねえ。姉ちゃんに冷たくあしらわれて、哀しくねえわけがねえ。けど、それを表に出したところで、誰にも受け止めてもらえねえから…… たったひとりで耐えるしかねえから…… だから、奴は自分で自分の感情を「殺し」ちまったんだ。最初から感じなければ、耐える必要だってねえんだから……

そんなわけで、俺はそれから「いぬ」ことなく、ずっとカイの傍にいる。

……どんなわけなんだって？

ほっとけねえからなのに決まってるんだろ。こんなチビのくせに、悲しみも苦しみもみんな抑え込んで、必死で自分保とうとしてるこいつのことがさ。

ところで、今、カイが熱心に帳面に書いているのは、いつもの勉強の内容じゃなく、自分がしゃべってる言葉を俺がしゃべってる言葉に直したものだ。カイ自身が、俺に「言葉を教えてくれ」って頼んできたんだ。

カイの話によれば、俺の操っている人語は、この「下^{しも}つ国^{くに}」の東隣にある奴の出身国「中^{なか}つ国^{くに}」のものなんだそうだ。

『じゃけん、教わつといたら、いつか実の家族に逢うたときにも不便せんじゃろ？』

そう言っつて、奴は初めてまっすぐに俺を見つめた。声と同様に澄み切ったそのまなざしは、もう「作り物」でも何でもなかった。表情も、もう「木偶人形」のそれなんかじゃねえ——そう気づいた瞬間、俺は、ここにいることを選んで良かったと心底から思った。なんだか自画自賛みてえになっちまうけど、やっぱ、「味方」がいるのといないのとじゃ、多少は「違う」のかな……みてえな？

それに、たまらなく嬉しかった。

カイみてえな立場の奴にとって、こんなふうに素直に自分の思いを口にするのは、きつと俺なんかの考えてる何倍も「勇気」や「覚

悟」が要ることなんだろう。まして、「実の家族に逢う」なんていう、ある意味、ここでは禁忌事項とさえ言える一言ならば、なおさら。

それを、俺にだけは話してくれた——それだけ、俺を信じてくれるってことじゃねえか。自分が何もんなのかもわからねえ、それどころか、ヒトですらねえ俺なのによ。

「……なあ。あんなあ」

不意に、カイが帳面から顔を上げた。

「あんな、えーと……」

記憶の糸を手繰り寄せようとするみたいに宙に視線を泳がせてから、おもむろに「中つ国」の言葉で奴は言った。

「一緒に、帰ろう」

「え……？」

「いつか、必ず、一緒に、帰ろう」

ゆっくりと、でもはつきりと、カイは繰り返した。

「そして、私は、家族に、逢う。おまえの、家族も、探す」

不覚にも、一瞬うるうるしちまった。

まったく、何て奴だろう——自分のことだけじゃなく、俺のことまでちゃあんと考えてくれてるなんてよ。「変わった奴だ」なんて、ほんと俺の見込み違いだった。こいつは「優しい奴」だ。優しくて……そして、俺なんかよりよっぽど「強い」奴だったんだ。

「そっだな」

親愛の情をこめて奴のほったをぺろりと舐めると、俺はうなずいた。

「帰ろうな。いつか、必ず一緒に帰ろう——『私たちの故郷』に」

数奇なめぐり合わせによって俺たちがその希望をかなえることになったのは、それから七年ののちのことだった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6385/>

白竜奇譚・出会いの巻

2011年7月23日13時43分発行